

今週の為替相場見通し(2025年9月22日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.50 ~ 148.27	147.95	146.00 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		1.1717 ~ 1.1918	1.1748	1.1700 ~ 1.1900
(1ユーロ=)	(円)		172.91 ~ 174.50	173.79	172.80 ~ 174.80
英ポンド	(ドル)		1.3464 ~ 1.3726	1.3467	1.3300 ~ 1.3800
(1英ポンド=)	(円)	*	199.22 ~ 201.27	199.31	193.00 ~ 203.00
豪ドル	(ドル)		0.6586 ~ 0.6707	0.6590	0.6500 ~ 0.6660
(1豪ドル=)	(円)	*	97.25 ~ 98.39	97.55	96.50 ~ 98.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1)今週の予想レンジ: 146.00 ~ 150.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

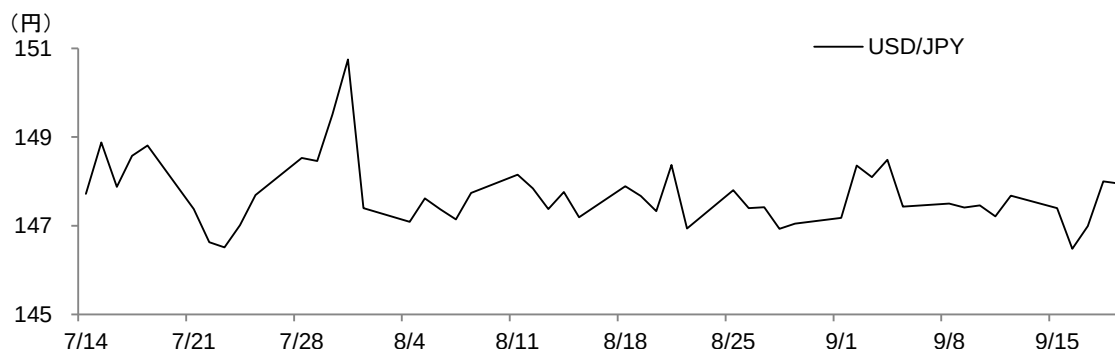
先週のドル/円は週半ばにかけてじり安も、その後は上昇に転じた。週初15日、147円台半ばでオープン。東京休日且つ、材料難の中で147円台半ばでの揉み合いとなった。16日、東京時間は小泉農水相の自民党総裁選への出馬表明やミランCEA委員長のFRB理事承認を背景にドル/円は上値の重い展開となり、146.70円付近まで下落。米8月小売売上高の予想比上振れを受けて反発するも、その後は米金利低下を受けて146円台前半へ。17日、FOMCは予想通り▲25bp利下げを決定したが、ドットチャートで年内2回の追加利下げが示された点などが市場の織込み対比ハト派と受け止められ、週安値となる145.50円まで急落。ただ、パウエルFRB議長の会見を受けてすぐに買い戻され、147円ちょうど付近へ。18日、ドル反発地合い継続。海外時間は、米雇用関連指標の良好な結果に米金利が大幅上昇し148円台へ。19日、日銀は政策金利維持を決定したが、2名による+25bpの利上げ支持、ETF等の売却決定が円買い要因となり、一時147円台前半へ急落。円買い一巡後は、植田日銀総裁会見でも早期利上げに向けた示唆はなく148円ちょうど付近まで反発。週央からのドル買い戻しの流れが続き、米国時間には週高値となる148.27円まで上昇。結局147.95円で越週した。

今週のドル/円は、日米中銀会合通過後でやや材料出尽くし感はあるが、その内容を踏まえた底堅い推移を想定。9月FOMCでは市場予想通り、9か月ぶりに▲25bp利下げが決定された。本会合やドットチャートで大幅利下げを主張したのはミランFRB新理事と見られるが、あくまで中央値としては年内2回の追加緩和を示唆。パウエルFRB議長は、労働市場下振れリスクを指摘し、予防的な利下げとした一方、インフレ再燃への警戒感も示し、過度な金融緩和への警戒感は後退している。FRBの独立性という観点は気がかりだが、当面ドルショートは仕掛けづらく巻き戻し局面に入ったのではないかと。一方、日銀は政策金利維持を決定。一部委員が現状維持に反対したものの、トランプ関税などの日本経済への影響を巡る不確実性を指摘しデータ見極めスタンスを維持している中で、追加上げのタイミングは未だ不透明。保有ETF・REITの売却もそのペースを考えると影響は限定的。持続的な円買い材料とはなりにくいとする。他方、候補者が出揃った自民党総裁選の行方にも注目が集まる。財政出動と金融緩和政策を支持するハト派の高市氏、石破政権の政策を引き継ぐと見られる小泉氏の一騎打ちが想定される。10月4日(土)の投開票を前に、関連報道で振られる展開には注意したい。今週の経済指標としては、26日(金)に米8月コアPCEデフレーターが注目か。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/15~9/19)の値動き:

安値 145.50 円 高値 148.27 円 終値 147.95 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第一チーム 武藤 智哉

(1) 今週の予想レンジ: 1.1700 ~ 1.1900 172.80 ~ 174.80 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週半ばにかけて堅調に推移したものの、その後は失速した。週初15日、ユーロ/ドルは1.1728でオープン。本邦祝日のため序盤は動意薄い展開となったものの、海外時間には米利下げ観測を背景とした米金利低下や、欧州株高を支えに1.17台後半まで上昇した。16日、FOMCを翌日に控え、全体的にドル安の動きが広がる中、ユーロ/ドルは1.18台まで上昇。その後も一方的なドル売りの流れが続くと、1.18台後半まで上値を伸ばした。17日、前日までのドル安は一服し、ユーロ/ドルは軟調に推移。注目のFOMCでは、今後の金利見通しが引き下げられたことで、ドル売り圧力が強まると、一時週高値である(2021年6月以来の高値)1.1918まで急伸した。ただ、その後のパウエルFRB議長の会見が、年内の大幅利下げ観測を後退させる内容となったことで、ドルの買い戻しが優勢となり、結局1.18台前半まで反落した。18日、序盤は前日からのドル買いが優勢となり、1.17台後半まで下押されるも、その後はリスクオンに伴う欧州株高などを背景に反発。ただ、この日発表された一連の米経済指標が堅調な結果となったことで、ドル買いが先行し、ユーロ/ドルは再び1.17台後半まで下落した。19日、特段目立った材料のない中、引き続きドル買い優勢の展開となると、ユーロ/ドルは1日を通して上値重く推移。結局1.1748で越週した。

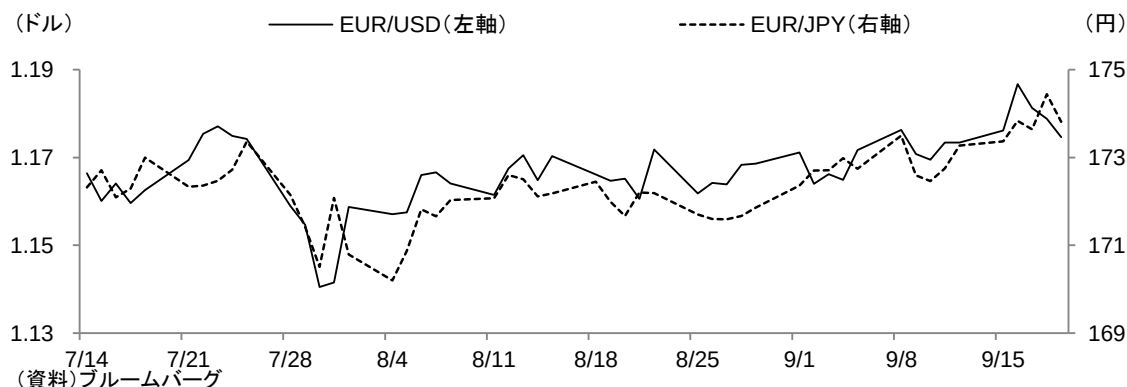
今週のユーロ/ドルは、1.17台を中心に方向感の出にくい推移を予想する。欧米の9月中銀会合を受け、当面は現状維持を基本路線とするECBと、今後も一定ペースで利下げが見込まれるFRBという構図が確認された以上、ユーロ/ドルの底堅さは引き続き維持されよう。一方で、市場はすでにFRBの利下げを相応に織り込んでおり、ここから急激に米金利が低下する展開は想定しづらい。係る状況下、今週はパウエルFRB議長を含む複数のFRB高官の発言が予定されている。先週のFOMC以降、市場ではドルを買い戻す動きが出始めており、発言内容次第ではこの流れが継続するか、ドル売りに転じるかを左右する材料になり得るため注意したい。その他、米国では25日(木)に新規失業保険申請件数、26日(金)に米8月PCEとFRBの今後の動向を占う上で重要な経済指標の発表が控えている。翻ってユーロ圏では、23日(火)に9月製造業・サービス業PMI、24日(水)に独9月IFO企業景況感指数が公表予定。8月の製造業PMIは3年ぶりに好不況の分かれ目である50を上回っており、今回も同様の結果となれば、ユーロ買い圧力につながろう。独9月IFO景況感指数については、ECBの利下げとドイツ政府の大規模なインフラ投資を背景に緩やかな改善が見込まれるが、回復のペースは依然として鈍く、相場への影響は限定的か。そのほか、今週はフランスの政治動向にも注意が必要だろう。直近では、財政再建策に反対する大規模デモやストライキがフランス国内で拡大しており、市場でも同国の政治リスクへの警戒感が高まっている。これによりユーロ/ドルには下押し圧力がかかりやすくなっており、関連ヘッドラインには引き続き留意すべきだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/15~9/19)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1717 高値 1.1918 終値 1.1748

(対円) 安値 172.91 高値 174.50 終値 173.79



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3800 193.00 ~ 203.00 円

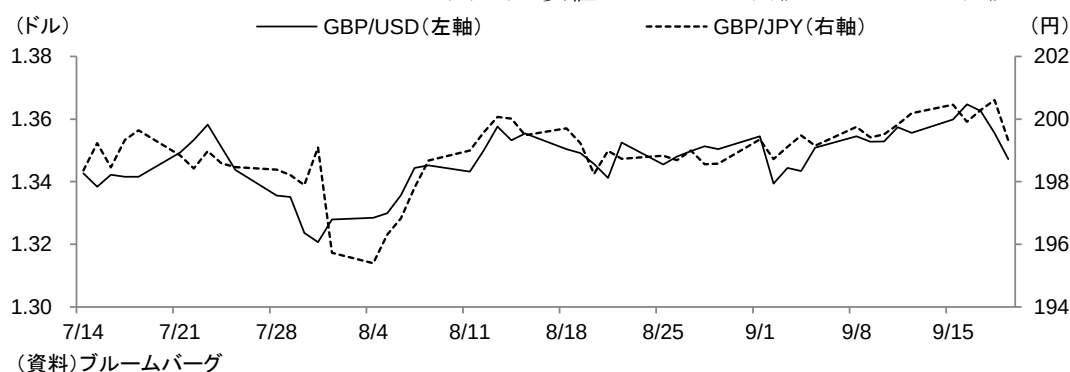
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は経済イベントに向けて上昇した後に反落し、週を通してみれば対ドルで下落した。週初15日はFOMCを控えて米金利低下につられてドル安となる。翌16日、引き続きドルが売られる中、英7月雇用統計は予想通りとなり、市場への影響は軽微。17日は、英8月CPIがサービスで予想を下回るも市場の反応は薄かった。その後、FOMCでは市場予想通り▲25bpの利下げが発表された。初動は、ドル安で動くもすぐに切り返され事実売りとなり、ショートカバーでドル高推移に転じた。18日は、BOE政策金利発表にて市場予想通り据え置きとなり、市場はあまり反応せず。雇用が悪化する中でインフレが根強く、利下げが難しいスタグフレーション的な状態が続いている。その後、米新規失業保険申請件数が市場予想対比減少となりドル高が加速。19日は、特段の材料なくドル高で小幅推移し、週末に渡った。

今週の英ポンドは前週の下落から反発し上昇する展開を想定。23日(火)に米8月PMIと英8月PMI、25日(木)に米新規失業保険申請件数等の複数の米経済指標が控えている。前週はFOMCを受けてドルのショートカバーが出ている中、米新規失業保険申請件数が市場予想や直近米8月雇用統計に反する内容となりドル高が加速した。今週は、ショートカバーが吐き出され落ち着き始めることを考えると、強いPMIや再び米新規失業保険申請件数が明確に弱含むなど、よっぽど利下げに反する指標が出ない限りは米英の金利への目線の違いから英ポンドが反発しやすいように思う。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/15~9/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.3464 高値 1.3726 終値 1.3467
(対円) 安値 199.22 高値 201.27 終値 199.31



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 原田 脩平

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6660 96.50 ~ 98.30 円

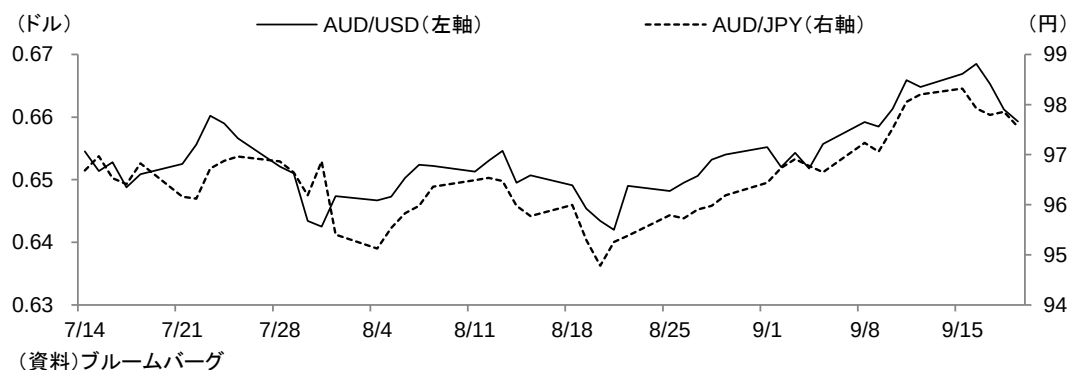
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週前半からじり高の展開となり、FOMC直後に年初来の高値を更新したが、その後は下落する展開となった。週初15日、0.6651でオープン。米金利低下に伴い米株が上昇し、0.6670台まで上昇するじり高の展開となった。16日も米金利低下に伴い、0.6670台で揉みあう展開となった。17日、FOMCを控える中で序盤から小幅に下落した。FOMCで▲25bp利下げが決定し、ドットチャートで年内2回の追加利下げが示唆されると、結果発表直後は米金利低下により年初来及び週高値となる0.6707へ急上昇したが、その後米金利が上昇に転じると0.6640付近まで再度下落した。18日、FOMC後のドルの買い戻しや、豪8月雇用統計が弱かった事を受けて、豪金利が低下し0.6620付近まで下落した。その後0.6660付近まで反発するも、米新規失業保険申請件数が市場予想を下回ると、ドル買いが強まり一時0.6608まで下落した。19日、日銀が政策金利を据え置いた事や米金利上昇もありドル買いが進み週安値となる0.6586まで下落し、結局0.6590で越週した。

今週の豪ドル相場は、下落基調の展開を想定する。30日(火)に迫ったRBAの金融政策決定会合では政策金利は据え置きが濃厚であるものの、先週発表された軟調な豪8月雇用統計の結果から分かるように豪州の雇用環境は悪化の兆しを示しており年内の追加利下げは濃厚、豪ドルは売りが優勢になるだろう。また、FRBが利下げを再開したが、トレンドを変えるほどドル売りが進んでおらずドル買い圧力も高い。今週の主な経済指標として、23日(火)に豪9月製造業PMI、24日(水)に豪8月消費者物価指数の発表を控えているが、これらの豪経済指標が市場予想を下回る場合には豪ドル売り圧力になるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/15~9/19)の値動き: (対ドル) 安値 0.6586 高値 0.6707 終値 0.6590
(対円) 安値 97.25 高値 98.39 終値 97.55



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。